



スコット・キャロンの

ニッポン応援団



「企業の存在意義は社会貢献である」というのは私の信念である。上場企業にはすべてのステークホルダーのために企業価値を向上させる使命がある。事業の社会的価値を高め、顧客価値を向上した結果、初めて株主価値の創造がなされるわけであるが、その企業価値向上の前提は「正当な利益」である。

最近、ESG（環境、社会、統治）投資への国内の注目度が高まっている。ESG投資の対象は企業なので、ESG経営がなければESG投資はない。ESGの真の主人公は企業であり、投資家の役割はその企業の正しいESG活動を多方面から支援することである。

サステナビリティ（持続可能性）を高めるESG経営を多くの方々に応援して頂きたい。そこでESGの社会的な意義について改めて整理させて頂きたい。

☆—☆—☆—☆

まずは「正当な利益」である。これは付加価値を創造し、第三者を犠牲にしない企業利益である。サプライチェーンの上流での児童労働や環境破壊の回避などが例として挙げられる。他方、利益を創造しない上場企業の経営に正当性はない。上場企業は社会からの人的資本・社会的資本によって成り立ち、それらの資源を有効活用する責任があるからだ。

社会的資本の一つは株主の貯蓄である。株主は長年の努力の成果を「投資」の形で企業に預け、企業はその大切な資金を「企業価値創造」の努力で返し、株主の貯蓄や老後の生活を守る。なんと意義のある社会貢献であろう。

企業の社会的責任は「社会の公器」としてステークホルダーに資する経営に努めることにある。「売り手よし、買い手よし、世間よし」を表す「近江商人の三方よし」という言葉があるが、これこそ

欧州発のESG、実は日本企業の原型

日本のステークホルダー型経営の原型ではないだろうか。上場企業の主要ステークホルダーである顧客、従業員、株主、そして地域社会にはそれぞれ異なったニーズがある。企業はこのニーズの最大公約数を追求し続ける責任がある。上場企業は「三方よし」の考えに基づいた価値向上を図る責務を負っているのである。

☆—☆—☆—☆

では投資家にとってのESGとは何か。投資家も社会の一員である。社会の一員として、企業の、そして地球全体のサステナビリティを高めることに貢献することが投資家の責任なのである。

ESGの視点で銘柄を選択することで社会的なリスクの軽減効果も見込める。投資家の間では企業がESGに注力することによる企業価値の引き上げ効果に懐疑的な見方もある。しかしESG強化とは企業価値向上とサステナビリティを高める取り組みである。企業が本業を通じたESG強化を実践し持続的成長への蓋然性が高まれば、結果的に社会的リターンとともに投資リターンも期待できる。

ESGの考え方はもともと欧州で発祥した。ただ、持論であるが、ESGは日本らしきそのものと言っても過言ではない。「三方よし」に見られるように、日本の資本主義は幅広くステークホルダーを重視し、日本企業の社会的責任の意識は世界トップクラスである。

ESG経営への注力は、日本企業が本来有する社会的責任の強い経営を磨くチャンスである。それにより、ステークホルダーのサポートがより得られ、社会的な好循環が生まれる。日本企業の皆様にはこれまで以上に社会的責任経営を推進して頂きたいし、私自身も経営者として可能な限り力を尽くしていきたい。さらに明るい日本を皆の力で作りましょう。